

令和5(2023)年度 第1回 学校評議員会の概要

1 日 時

令和5年6月22日(木) 9:30

2 場 所

県立芦屋国際中等教育学校 応接室

3 出席者

別紙参照

4 概 要

次の3点について、それぞれ学校から説明の後、評議していただきました。話題ごとに概要をまとめます。

- (1) 学校経営の重点
- (2) 21期生の状況
- (3) 令和5年度主な取組

○スクールポリシー

評議員 令和6年度入試も、日本と外国の重国籍者は、日本国籍者の枠で受検することになるのか。

学 校 平成30年に、募集枠の基準が変更になって以来、特に変更はない。

評議員 日本語の指導が必要な生徒を受け入れるのは本校の設置目的に明記されている。どういう生徒を受け入れて、どのような教育を行うのかが肝要である。

学 校 教育の目的は、人格の完成である。生徒個々に応じたアプローチで、人格の向上を目指している。進路は、その結果として、それぞれの目標の入り口に到達できるよう指導している。

○教育理念

評議員 本校の教育理念を理解した上で、生徒と向き合うための教員側の教育体制はあるのか。

学 校 各教科が教科会議の中で行っている。また、新着任者に対しては、4月当初に研修会を行い、日本語の不自由な生徒に対する授業の注意点等を学ぶ機会を持っている。

○母語支援

評議員 21期生の母語支援の状況はどうか。すべての母語に対応できているのか。

学 校 ほぼすべての母語に対応できている。一部対応できない言語もあるが、当該生徒が日本語を理解できるので問題ない。基本的に母語支援が必要な生徒にはすべて対応できている。

○学校設備

評議員 少人数できめ細かな授業をされており、子どもたちは非常にいい環境で学んでいるのが分かる。一方で、エアコンが各教室に整備されておらず、特に夏場は厳しい環境だと聞いている。PTAでも寄付金の活動等引き続き取り組んでいこうと思っているが、学校としても、教育委員会に働きかけをお願いしたい。

学 校 現在ホームルーム教室にはエアコンが整備されているが、その他の教室には整備されていないのが現状である。県の計画では、その他の教室についても、令和6年度に着工し、令和7年度からエアコンの使用が可能になる予定である。しかし、本校は特別に、普通教室棟の選択小教室にエアコンを今年度整備してもらえることになった。残暑に間に合ってほしいと願っている。

○情報発信

評議員 芦国ブランドを、もっと情報発信していくべきではないか。モデルケースとして、兵庫県にこんな中高一貫校があるということを対外的にアピールする必要があるのではないか。

学 校 本校は昨年20周年を迎えたが、本校のことを認知していない人が案外多い。そこで、まずは地域の方に本校を知ってもらう取り組みを積極的にやっっていこうと考えている。市内の県立学校との交流をはじめ、芦屋マダン、尼崎のサマーセミナーに継続して参加し、情報を発信していく。さらには、愛知サマーセミナーにも参加し、本校のことを広く知ってもらう取組を行って行きたい。20周年を迎え、あらためてこういった交流を積み上げていこうと考えている。

評議員 日本語が不自由な生徒が、地元の中学校に通ったものの、言葉がわからず、元気もなくなり、登校できなくなったという話も耳にしたことがある。もし本校のことを知っていたら、その生徒の未来も変わったかもしれない。やはり、本校のことを広く知っていただけると良いと思う。

○文化祭

評議員 文化祭での来場者数はどのくらいだったのか。

学 校 今年は2日間で約2,000人の来校者数であった。特に、今年はコロナ禍明けということもあり過去最高の来校者数であった。

○OAIタイム

評議員 全校的な実施体制や後期課程での展開の可能性はどうか。

「教育課程の基本方針」に記載の多文化・多言語な学校環境づくりの促進に加えて、母語・母文化の保障や、外国にルーツのある保護者や地域・関係者学校に参画する機会にもなり地域に開かれた学校づくりにも有用ではないか。

○部活動

評議員 男子生徒が選択できる運動部が少ないのではないかと。ただ、部活動の地域移行も取り沙汰される中、そもそも公立学校において、部活動のあり方はどうなっているのか。

学 校 本校の部活動への加入率は非常に低い。自宅が遠方であることや、生徒のルーツにも起因すると考えられる。その上、本校は男子生徒数が非常に少ないので、この状態で部活動を増やすと、人数的に成り立たない部の現出が懸念される。地域移行については、高等学校では難しいというのが現状である。中学校では全国的に移行しようという流れの中で、本校も前期生に関しては、テニス部が年に数回ではあるが、香栞園テニスクラブでお世話になることが可能になるかもしれない。剣道部は昨年より外部指導者に来ていただいている。

評議員 部活動は生徒会活動の中の、生徒の自主的な活動である。生徒自身が、自主的に活動を始め部にするという流れであれば、部の新設は可能なのではないかと。

学 校 活動場所の確保や顧問の問題、活動に参加する人数等条件が揃った段階で、実際に活動が持続可能か判断する。すべてクリアできれば同好会

としてスタートすることになる。その後活動が順調であれば、部として認められるかどうかの判断になるが、生徒会の予算も関係してくるので、そう簡単なことではない。

評議員 文化祭で吹奏楽部が楽器の修理代を捻出するための募金活動を行っていた。PTAとしても、寄付を募っているところではあるが、学校側の予算措置はどうなっているのか。継続的に部活が続けられるような措置をしていただけるとありがたい。

学 校 生徒会で予算折衝を行っているが、生徒会の予算自体が非常に厳しい状態である。修繕費などは別立ての会計項目から支出しているが、楽器の修理は非常に高額であるため、一度に複数の楽器を修理することができない。一部を翌年度に回すなどやりくりしているのが現状である。

評議員 部活動は自主的な活動であるので、受益者負担が原則では無いのか。生徒の皆さんが好きな活動をすることはとても大事なことだとは思いますが、その活動が学校にとって何なのかというあり方は考える必要がある。その範囲内で、PTAや同窓会ができる支援があれば、行っていきたい。

学 校 部活動に関しては、平成20年告知の学習指導要領の総則に学校教育活動の一環であると明記されている。しかし、広く集めたお金を、どう還元していくのかは整理する必要がある。

評議員 部活動の問題も、教員の働き方を切り離して考えることはできない。学校外に依存せざるを得なくなってきているが、そうすると、今度は児童生徒に対する指導責任の問題もあり、なかなか複雑な問題である。

○20年の総括

評議員 中等教育学校は当時、日本中に23校作られた。それぞれの学校にミッションがあったのだが、それが本当に果たされているかどうか検証が必要である。本校では本当に国際的なマインドを持った人材を育成することができたのかどうかを評価する必要がある。

スクールポリシーでは、育てる、養う、育むと掲げられているが、私たちはこういうことができるようになるんだというスチューデントポリシーもあっていいのではないかと。そして、そこを意識して、進路選択を考えてほしい。国立大学に入るからいいのではなく、結果として東大に行く生徒が増えてもいいが、東大を目指すのはやめてほしいと当時、知事にはお

願いをした。パティシエを目指す人が出てきたり、その人がパリに行ったりとか、そういう多様なところが本校の強みである。そのあたりの本校の良さがうまく伝わっているのか気になっている。

大学の入試制度も変化しているので、高等学校でも探求や独自教科を取り入れ、それをアピールポイントに進学できるような制度を設計しておく必要がある。入試制度の中で、記憶力はもはや求められていない。いかに個性的であるかとか、いかに世界で通用するかということをアピールできる、自信にあふれる生徒が求められている。綺麗な花壇の花ではなくて、踏まれてもどんどん伸びて、広がっていく雑草のような生徒がいいのではと考える。

今後の教育戦略として、Chat GPTのような生成AIをどのように扱うのか考えておいた方がいいのではないかと。授業においては、情報メディアを活用できている。教材をクラウド上で共有し、生徒が学びたいときに学べる仕組みがあると良い。そうすることによって、一つのことを他方面から考えていく姿勢もおのずと形成されるかもしれない。道具をどう使うのかというマインド等、それを判断する力を本校では育てている。それも国際感覚を持って育てている。単なる進学校だと思いたくないでほしい。これから20年、40年、60年経ったときに、世界の中にどれだけの人間が散らばっていて、それが横につながっているのを想像してほしい。そういうのが本校の一つの売りである。

もう一度全国に広がっている中等教育学校について、大学とどう接続するのかや、それぞれの作ったときの理念や目的が生きているのかどうか検証したい。本校はとても成功した例ではあるが、私自身も、これでよしというところばかり探していた気がする。

○評議委員会を終えて

評議員 私もいろんな高校を回ったが、本当にいい学校である。生徒はとても愛嬌があって挨拶ができる。電車でも、また体育館でも見かけるが非常に誠実な印象を持っている。ただ、私たちの時代と違って、体もスマートで今時の子どもらしく、線が細い印象を受ける。そこをどう鍛え上げていくのが課題ではないかと感じた。

校長の言葉にもあったが、大人でも予想が付かない激変する未来を生きていくために、適切に判断できる力を生徒たちに身につけさせるのが、現在の大きな課題である。そういった力を目指すとき、学力は一つの重

要な要素になる。非常に熱心な先生が多く、生徒の頑張りもある。生徒はスイッチをうまくひねったら、どんどん自主的に勉強する。さらに、熱意のあるPTAや同窓会の方々のバックアップ力も備わっている。

現状でもとてもいい学校であるが、これから20年たって卒業生が、海外や、また、日本の中核でリーダーシップを取っていくこと、また同時に、在校生一人一人が本当に有意義に毎日を過ごしているといったところが芦国のブランド力になってくる。中高一貫で6年間学べるのも魅力であるし、普通の県立高校なら出かけて行って行う交流が、毎日学校でできているのも非常に魅力的である。

今後はより一層、部活動や被災地ボランティア等の体験を通じて、生徒に自信や誇りを持たせ、人生をたくましく切り拓いていける生徒が育つことを期待している。